



2020年(令和2年)11月12日 木曜日

発行所 茨城県立下妻第一高等学校新聞部
発行人 大久保 敦彦
吉田 俊則
編集人 渡邊 琴美

「誰一人取り残さない」つくば市

2015年に定められた*持続可能な開発目標(以下SDGs、ロゴが図1)をもとに内閣府がSDGs未来都市を平成30年度から選定している。同年度に選ばれた29都市の1つが茨城県つくば市である。そこで今回はつくば市のSDGsに関する業務を担う、政策イノベーション部持続可能都市戦略室の吉岡直人さん(以下、吉岡さん)と小松愛実さん(以下、小松さん)にWeb会議ツール「Zoom」でオンライン取材をした。



図1 SDGsのロゴ

◆SDGs未来都市に選ばれた経緯
SDGsが2015年に制定された以後、つくば市では2017年に初めてSDGsに関する勉強会が行われたという。2018年2月には「持続可能都市ビジョン」で包括都市、人材都市、科学技術都市、共創都市という4つの都市像を掲げた。また表1にあるようにつくばSDGsフォーラムを開催した。同フォーラムを契機にSDGsに関する活動が増え、同市の事業がSDGsの17の目標別に整理し始めたという。同年にこのような取組が評価され、茨城県内で唯一のSDGs未来都市に選定された。

表1 つくば市のSDGsに関する取組

Table with 2 columns: 年 (Year) and 出来事 (Event). Rows include events from February 2018 to March 2020, such as the publication of the 'Sustainable City Vision' and the city's selection as a Sustainable City.

◆つくば市の取り組み
つくば市は「つくばSDGs未来都市計画」(以下、同計画)を立てている。同計画には「CIVIC事業」(図2)という5つの柱を立てが行われ、つくば市として取り組むべき優先課題を示している。同市では子どもの貧困や少子高齢化などの問題を抱えているが同計画をもとに年齢や性別、国籍を問わず誰一人取り残さない社会を目指すことが不可欠だと小松さんは話す。同計画は順調に進んでいるという。また「つくば子ども未来プラン」(以下、同プラン)は2019年に策定され、児童や生徒に対する学習支援

事業の拡充や教育機関との連携で子どもの居場所づくりを進めている。学習支援では学習インフラの整備、居場所作りでは子ども食堂実施団体への支援などを行っている。同プランではSDGsの理念である「誰一人取り残さない」に沿った、包括的なサポートを行うと吉岡さんは説明する。さらに子どもの未来を支援する仕組みである「つくば子ども青い羽根基金」による寄付を始めているという。そして「これからのやさしさのものさし」(以下同ものさし、図3)を作成している。同ものさしは多様なつくば市民にSDGsの考えを普及させる親しみやすいイラストである。同ものさしは市内を走る公共バス「つく

バス」にラッピングされ、市内でのSDGsの普及を推進している。また市内では、「世界のあしたが見えるまち」というビジョンの下、革新的な技術やアイデアで社会課題を解決するSociety5.0の実証実験が行われている。つくば市は様々な方法で誰一人取り残さない社会へと歩みを進めている。

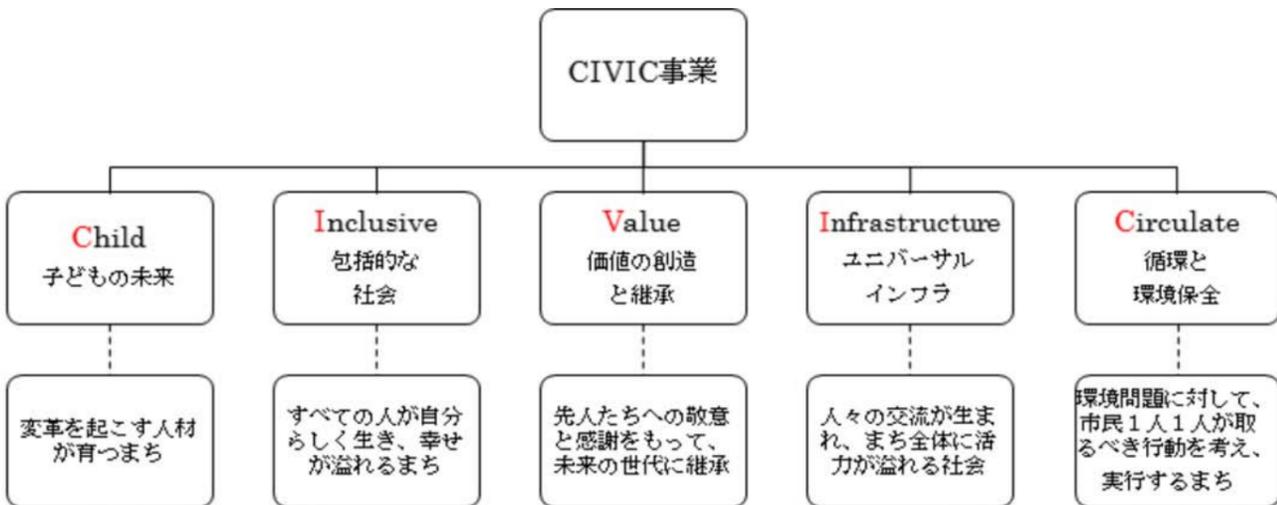


図2 CIVIC事業の概略図(「つくば市SDGs未来都市計画」から作成)



図3 「これからのやさしさのものさし」の名刺デザイン(小松さん提供)

◆高校生がすべきこと
高校生がSDGsに対して行うべきことはSDGsを自分事と捉え、2030年でのSDGs達成に向けて社会を見つめ直すことだと吉岡さんは語る。またゴミ拾いなどの身近な活動からSDGsに向けて取り組んで欲しいと小松さんは話す。高校生には日常生活を顧みながらSDGsにつながる事業に参画したり、SDGsの理念に合う行動をしたりすることが求められる。今年3月には「持続可能都市宣言」が行われ、「地域や地球社会が直面する少子高齢化、貧困と格差、気候変動などの課題も克服していく必要がある」と指摘している。私たちは自身と未来の世代そして世界に共通する使命を有し、SDGsに励まなければならぬ。今回、お忙しい中取材に応じてくださった吉岡さんと小松さんに感謝を申し上げます。(稲葉)